

貯蓄考

——織田作之助の小説をめぐって——

佐藤 秀明

1 貯蓄の臆見^{ドクサ}

本論は、織田作之助の小説を論じる文学論ではあるが、論文の主旨は「貯蓄」である。織田作之助ほど金銭の出入りを具体的に書いた作家はいないだろうし、織田の作品ほど、人の貯蓄意識や貯蓄行動を見ていく上で面白い素材はないだろうともまた思われる。

では、なぜ貯蓄なのか——。私たちの日常生活においても、また小説の筋においても、労働の対価あるいは消費、そして忘れてならないのは借金についてであるが、そこには意識が巡るのに、貯蓄となると人の注意は貯蓄高にだけ向かい、あとは放置されているのが常である。人々の経済活動において、貯蓄ほど重視されながら顧みられることの少ない行為はあるまい。ところが、どうも貯蓄というのは、そんなに単純なものではないようなのだ。

そもそも人はなぜ貯蓄をするのだろうか。将来の出費に備えてという大方の理由はすぐに浮かぶが、それ以前に、貯蓄はするものだ^①という臆見^{ドクサ}がまず立ちはだかつていそうである。例えばジャーナリストの池上彰は、次のように述べている。

私も小学校の頃にお年玉をもらうと、これは貯金をしなければ

いけないものなんだ、使っちゃいけないんだとなぜか思い込んでいました。多くの人たちがそうだったと思います。^①

ここには、規範化し硬直した貯蓄についての素朴な見解が表れている。一九五〇年生まれの子の池上彰のこの貯蓄性向は現代にも受け継がれていて、テーマパークのキッザニアでは受け取った通貨「キッゾ」を、本家のメキシコの子どもたちはみな使い果たして帰るのに、日本の子どもたちはATMに預金して帰るとい^②う。一九七三年からの第一次オイルショック時には、インフレにもかかわらず貯蓄率が上がったとい^③うのも、日本では投資よりも預貯金に人々が動くのも、貯蓄についての強力なドクサが働いているためであらう。私たちは貯蓄を、大まかなところで無意識にほとんど習慣として自動的に行っている——むしろそれが可能でない人も多くいるのだが、そういう人も貯蓄することは望んでいて——いずれにせよ、あまり考えていないのである。

富永健一と間々田孝夫は、日本人の勤儉貯蓄の精神は、儒教、仏教、武士道、そして石門心学や二宮尊徳の教えによって「国民の心にしみこんでいった」と述べている。^④外山茂も「日本人の伝統としての勤勉」と「貯蓄」は、「同じ基盤から生れてきていると見るべきである」と言^⑤い、同様のことを述べている。貯蓄を好む心性が日本人のエートスとなっているのは否定しがたいが、そもそも貯蓄は、人にとって「自然

な行為なのだろうか。それとも道德によつて撓められた「自制的」な行為なのだろうか。

人が生存の安定を図るために糧を備蓄するのは「自然」な営みであろう。とはいえ、糧が慢性的に不足する状態であれば、備蓄は苦痛を伴うので、精神を支える道德が必要となる。二宮尊徳は『二宮翁夜話』で「夫人道は自然に反して、勤めて立つ処の道なれば貯蓄を尊ぶが故なり」と言い、「貯蓄」が「自然に反」する「人道」だと捉えていた。⁶「自然」か「人道」かは、貧富の状態にも生活環境にもよりどころとも決めがたく、もし貯蓄する余裕が見出せれば、貯蓄のドクサは鞏固になるのだが、しかしそれでも、ここには道德が介入する余地はありそうである。スマイルズの『西国立志編（自助論）』や内村鑑三の『Representative Men of Japan（代表的日本人）』もそれを後押ししている。

『二宮翁夜話』には、「今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲るの道を勤めざるは、人にして人にあらず。十銭取て十銭遣ひ、廿銭取て廿銭遣ひ、宵越しの銭を持ぬと云は、鳥獸の道にして、人道にあらず」とあるが、このような言説が有効であつたということ自体、「宵越しの銭を持ぬ」人が多くいたことを明かしている。共同体の互助的な無尽講や頼母子講はあつたにしても、個人的な貯蓄に抵抗感を覚えた人は少なくなかつたようだ。『郵便貯金局郵便貯金事務史第一編』には、明治八（一八七五）年の貯金預所を創設した頃のこととして、「然ルニ当時封建ノ余弊上下ニ瀾漫シ金銭ヲ輕視シ貨殖ヲ賤シミ貯蓄ヲ為スヲ以テ恥辱トシ随テ得レハ随テ散シ敢テ将来ヲ顧念シ非常ニ処スルノ念ナク」と書かれている。⁸同様の文句は、明治七年制定の「預金預り規則」の「公告」での「下等一般ノ民人朝ニ在テタヲ謀ラス、得レハ即チ之ヲ費シ甚シキハ節儉貯積ヲ以テ恥ト為ス風アルニ至レリ」に

も見る事ができる。⁹これらの史料からは、江戸から明治初期までの人々には金銭を卑しめ貯蓄を恥じる風習があつたことが分かる。田中光は、一九世紀の日本では「統計的に預貯金の額は大きいとはいえず、貯蓄率も決して高いとはいえなかつた」と述べ、個人の貯蓄性向に変化が生じたのは「20世紀に入つて」からだといふ。¹⁰つまり、貯蓄を好むとされる日本人のエートスも、貯蓄はするものだといふドクサも、歴史的に形成された近代の習慣だつたということになる。

個人の貯蓄性向が道德を伴う経済生活の改変だとしても、それを推進したのは、二宮尊徳や石田梅岩の思想を受け継いだ人たちというよりは、帝国日本の政府だつた。貯蓄増強中央委員会編の『貯蓄運動史——貯増委30年のあゆみ』は、「わが国の貯蓄運動は、こうした国家的要請（引用者注・富国強兵）にもとづいてスタートしたので、明治、大正、昭和戦前・戦中を通じ終始政府の主導により推進されたことが特色といえる」と明記している。¹¹日清戦争後の戦後経営や日露戦争の戦費調達のために、さらには第一次大戦後、関東大震災後、昭和二年の金融大恐慌後には、国家を挙げての強力な貯蓄奨励運動が実施され、それはアジア・太平洋戦争に際してはもちろんのこと、戦後のインフレ対策にまで及んだのである。戦争となれば政府は軍事情債を発行し、銀行や郵便局の預貯金がそれを引き受け戦費として使われた。個人の生活改善のための金銭は、民間の講からも預貯金として国家事業に流れていく仕組みに組み込まれていったのである。もとより金融機関は産業界の成長を促す公共的な役割もあつたから、貯蓄を介して個人は国家目的と繋がっており、とりわけ昭和十年代には、政府が国民に無理な儉約を課しても貯蓄を半ば強制したのである。

このように見てくると、ささやかな金額を預け入れる行為に息苦しさを感ずる人もいようが、そういう人は、織田作之助の「放浪」や「ア

ド・バルーン」や長編『わが町』の一文無しになった主人公に、自由な爽快感さえ感じるかもしれない。思えば貯蓄は、宵越しの銭を持たぬ^① 気楽さを人々から奪ったのである。坂口恭平『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』（太田出版、二〇一〇・八）や田村ゆに『わたしを幸せにする〇円生活』（幻冬舎、二〇二五・七）のような実践、あるいは藤原章生の南アフリカでの生活レポート「25年後のアフリカ番外編 金^②はためずに使い切る」などには、現代資本主義の周縁でなされる^③ 所有^④と^⑤贈与^⑥の段差のないその日暮らしの気楽さが窺える。そのような生活においては、おそらく備蓄や貯蓄は、道徳的にネガティブな性質を帯びてくるであろう。貯蓄が必ずしも善ではないとする道徳律は新鮮だ。

ことほどさように貯蓄には、様々な次元の意味が絡み合っているのである。貯蓄は、可処分所得の一部を金融機関に預けることによって完結的に秩序づけられているのではなく、預貯金者の動機、それを知る家族や親類縁者の思惑、経済の情勢や産業界の動向、政府が策定する国家目標などが絡み合い凝固する場である。無自覚のまま慣習化した貯蓄の現実^⑦は、じつは複数の異なるレベルの意図によって支えられているのである。

——前置きが長くなった。本論は、織田作之助の文学作品を題材にして、貯蓄の現実を解きほぐしてみること、貯蓄をめぐる社会と人間を見ようとするものである。それが何を明らかにするのかと言えば、一つにはオルタナティブな生の在り方ということになるが、おそらく本論はそこに落着せず、貯蓄する生活に追い込まれ、そこに安住する人が表す貯蓄の人間的な意味ということになるだろう。

2 織田作之助作品の中の貯蓄

本節では、織田作之助の小説に描かれた貯蓄の種々相を見ていく。小説内の貯蓄行動を鏡として、貯蓄に関する私たちの固定観念を浮き彫りにし、そこから小説の読み換えのための価値の転換を探り、その上で織田作品全体の核心に迫りたいと考えている。

「夫婦善哉」（『海風』昭和15・4）の蝶子と柳吉は、未発表に終わった「続 夫婦善哉」に至ると別府に居を移し、理髪店向けの化粧品販売などの商売を始める。「三年目には、二千円近い貯金ができた」という。しかしそれまでの貯蓄では苦勞が絶えなかった。蝶子は「ヤトナの儲けの半分ぐらいいは貯金していた」が、隠していた貯金通帳を柳吉が持ち出して「友達を呼び出し、難波新地へはまりこんで」すっかり使い果たしてしまう。二年して貯金が「三百円を少し超え」と、柳吉が芸者遊びで百円使ってしまう。さらに三年経って「やっと二百円たまった」と思ったら、柳吉がそのうちの五十円を「飛田の廓で瞬く間に使ってしまった」うというありさまである。

蝶子の貯蓄目的は、はじめは生活の安定を図るものだったが、そのうち「陽気」な気性ゆえに何か商売を始めようと思いつき、そのため資金となる。その心底には「維康を一人前の男に出世させたら本望や」という、蝶子を認めようとしないうちの柳吉の父親への承認欲求があった。「そう思うことは涙をそそる快感だった」というから、貯蓄行動と承認欲求とは必ずしも合致していない。柳吉を「一人前の男に出世させる」夢と貯蓄とはどこかずれているし、父親の承認との間にも依然として距離がある。柳吉の散財はその隙を突く行為であり、散財が、勘当の解けない柳吉の鬱屈のはけ口だと理解してしまう蝶子にも隙が

ある。だから蝶子の貯蓄は、表層的な貯蓄目的とは裏腹な、柳吉に散財させるための貯蓄になっているのだ。そのことをテキストの語りは暗に匂わせながら、蝶子は気づかない。金銭のもつ汎用性の高さは、貯蓄の目的を容易に変質させ、当人も意識しないものにする可能性がある。

梅田新道の化粧品問屋の跡継ぎだった柳吉には、[〃]使い果たす文化[〃]自分に残さず、他人と使う文化[〃]とでもいった心根が強くあつて、それに促されて散財しているように見える。蝶子と東京に駆け落ちし、父の店の売掛金三百円を徴収して、蝶子の置屋への借財や今後の生活をも顧みず、熱海で蝶子と芸者遊びに耽る柳吉には、筋金入りの浪費願望がある。それを[〃]ぐうたら[〃]と非難する人からは、柳吉固有の消費意思が見えない。藤原章生が紹介した南アフリカの食事や酒を「貢献」するのが当然の、「金はあるうちに使え」という文化、「おごりたがる」文化を横に置いてみれば、[〃]甲斐性者の女房にぐうたら亭主[〃]という蝶子と柳吉を見る見方は、勤儉貯蓄の二宮尊徳的文化の文脈から一步も出ていないことがはつきりする。柳吉は、勤儉貯蓄の文化が根付いた近代日本にあつて、堅実な貯蓄を批判する異文化存在だと評すれば、失笑を買わざるをえないだろうが、その失笑の根源が柳吉の消費によって衝かれているのである。柳吉は単なるダメ人間ではなく、彼の遊蕩は、勤儉貯蓄のモラルが確立した時代への、遊び好きでいい加減な本性と怠け心から来る文化的な反撥である。柳吉を中心に置いて見ると、「夫婦善哉」は、金銭をめぐる価値の転倒を潜ませた小説になるのである。

金銭に関して、合理的でない振る舞いをする人たちはほかにいる。一銭天婦羅^{てんぷら}を商う蝶子の父の種吉は、材料を厚く切つて提供し、炭代や醬油代を計算に入れていないので損が生じているのに気づかない。

織田の小説には、「木の都」(「新潮」昭和19・3)の学生向けレストランを経営していた矢野や「表彰」(「文芸春秋」昭和20・12)の料理屋の春吉など、「口銭^{こうせん}よりは客の来てくれる方が大事らしく」(「表彰」)見える人たちがいる。これでは貯蓄はおぼつかない。それは他人と分け合う心持ちが働いているからであり、その点で彼らは、柳吉の放蕩との間に見かけほどの距離があるわけではない。

それに対して、「俗臭」(「海風」昭和14・9)の兒子^{にこ}権右衛門のように、順調に貯蓄を殖やす話もある。和歌山県有田郡湯浅の魚問屋の父が放蕩の末に借金まで作つて死んだので、長男の権右衛門が弟妹たちを奉公させて、自身は一万円の金を貯めるのを目標に奮闘する。様々な商売に手を出した挙げ句、金属の廃物回収で当て、その間の貯金額が五百円、六百元、三千元、二万円、十万円と殖えていく様が記され、四十三歳の昭和三年には百万円の財を築いたという話である。この小説は、貯蓄自体が目的化している点で通俗物語風の話になっているのだが、題の「俗臭」が辛くもそれを相対化している。貯蓄はそれ自体を目的とすることができ、そうなると人生の目指すところは手段になるから、いくらでも融通が利き、どんなあくどいこともずるいことも精神の負担なく遂行することができる。貯蓄の目的が、貯蓄に付随していた道徳を脇に退けて、常識に背く自由をもたらすのである。それを作者は「俗臭」と呼んだ。

「放浪」(「文学界」昭和15・5)は、所持金を使い果たす哀れな兄弟の話である。兄の文吉は岸和田で筍を売った三十円を手にし、無賃で酷使する叔父の家を出奔して、忘れられない「まむし」を食いに難波に出て来る。散財し、残金で買った猫いらずで死んでしまうのだが、おそらくこれまでほとんど金銭を使ったことのない文吉の散財は、少額ながら常軌を逸していて、寿命を減らすために残金を減らしていくか

のようである。叔父を裏切つて得た三十円を手許に残してはおけないという強迫観念なのか、いわば命がけの散財をするのだ。それは金銭を卑しみすぎさま使い果たしたかつての日本人を、大都市の中に放り込んだような図である。

弟の順平は親戚の料理屋で板場の腕を磨いていたが、「貯め込んだ祝儀」二百円を手に逐電し、大阪、東京、別府を渡り歩き、未経験の河豚料理で客を死なせてしまい、徳島、仙台の刑務所に収監され出所して大阪に戻る。橋の上で六円五十二銭の所持金を二度数えようとしたときに、それを川に落として一文無しになってしまう。鷺田清一は、ヘーゲルの『法^レ「権利」』の哲学の要綱（『法の哲学』）やガブリエル・マルセルの『旅する人間』を基に「人は所有者であることをやめるかぎりで所有者たりうる」という逆説、もうすこし言葉を足していけると、財としての事物は、それを譲渡しうるものとしてわたしが放棄する用意があるかぎりにおいてのみ、わたしの所有物であるという逆説¹³が「所有」には成立するといふ。これは哲学的論理のレベルだけでなく、実感としても理解できる。順平の所持金も、川に落としたことで順平の所有の意識が強まる。「歩き出して、紙袋をすべり落した右の手を眺めた。醜い体の中で、その手だけが血色よく肉も盛り上って、板場の修行に冴えた美しさだった。そうや、この手があるうちはわいは食べて行けるんやつたと、気がついて、蒼い顔^{あお}がかすかに紅みを帯びた」とあって、この小説は閉じる。所有を離れた金銭の所有意識が自分の「右の手」に転化し、希望を生じさせたのである。¹⁴「板場の修行に冴えた美しさ」をもつ手は、手に職をつけるという意味では比喩的な「貯蓄」にほかならないが、順平が預貯金を持たないことが、手の美しさを際立たせている。

預貯金は、資産の価値を保証しないこともある。インフレーション

である。貯蓄を奨励する冊子「貯蓄時報」に載った高橋政雄「貯蓄のうらとおもて」でさえ、「だから、インフレの時にカネを貯蓄するのはバカだということになる」と述べている（むろん結局は、貯蓄を奨励するのが¹⁵）。織田のテキストは、戦後の悪性インフレに対抗するための庶民の換物行為も書きとめている。「世相」（「人間」昭和21・4）には、戦後のインフレの中で、金巾（綿布）を一ヤール十七円で買い溜めようとした話や、煙草の光が千箱単位なら一箱十円で買える話が出てくる。「世相」は昭和二十一（一九四六）年が小説内の現在なのだが、「もう十年にもなるだろうか、チェリーという煙草が十銭で買えた」とある。昭和十一年には、光もチェリーと同じく十銭だったから、十年で百倍になったということだ。光は翌昭和二十二年十二月には一箱五十円に値上がった。¹⁶

そんな社会状況においても政府は、「通貨安定対策本部」を衆院内に設置し、大蔵省をして「救国貯蓄運動」を起こしたのである。¹⁷国民生活を犠牲にしても貯蓄によってインフレを抑えようとしたのだが、政府からすれば、インフレを抑えることが国民生活を正常化するということだったのだろう。しかし、個人の貯蓄の価値は下落せざるをえなかった。

新円切替も、国民を巻き込んだ貯蓄によるインフレ対策である。幣原内閣が新円切替を発表したのは昭和二十一年二月十六日で、国民に預貯金を強制し、一世帯につき一カ月で五百円まで新円で下ろすことができる制度で、市中の通貨を金融機関に吸収して流通量を抑制しようとしたのだ。ここでも換物行動が起こり、「郷愁」（「真日本」昭和21・6）には、市電の回数券一万冊を旧円で買い、新円で売り捌くことを思いついた人の話が出てくる。国民の貯蓄性向を利用してインフレ時に貯蓄を強制した政府に、庶民が反抗し裏をかけた図である。「生産

が伴わねば、どんな手を打っても同じだ。しかもこんどの手は生産を一時的にせよ停めるようなもんだからな。生産を伴わねば失敗におわるに極ま^きっている。方法自体が既に生産を停めているのだからお話にならんよ」という台詞が出てくるが、資金を失った産業界は「生産を一時的にせよ停めるようなもん」であり、そうなるモノ不足が加速しやミ値が高騰するので、この台詞は事態を正確に批判していた。インフレ時の貯蓄は人々の生活を苦しめるだけなのだが、戦後の混乱期には政府がそれを強要したのである。

「世相」に、「オダサク」と呼ばれる作家が「僕はほら地名や職業や数字を夥^{おびただ}しく作品の中にばらまくでしょう。これはね、曖昧な思想や信ずるに足りない体系に代るものとして、これだけは信ずる具体性だと思つてやつてるんですよ」と言う場面がある。よく引かれる箇所^{箇所}で、作者自身が自作の特徴と核心を解説したように読める。しかし織田作之助の小説には、このような「これだけは信ずる具体性」とは次元を異にするような妙な人間が描かれていて目を引くのである。むしろそちらの方が、織田の文学の核心にあるのではないかと思わせるところがある。

例えば、「勝負師」(「若草」昭和18・10)にある将棋の坂田三吉が言う「子供の泣き声」である。

「どういふもんか、私は子供の泣き声いふもんがほんに好きだな、あの火がついたみたいに声張りあげてせんど泣いてる子供の泣き声には、格別子供が好き嫌いやいわけやおまへんが、心が惹^ひかれてなりまへん」

そして泣き声を聞くと、「自然に心が浄^{きよ}まり、なぜか良い気持ちになつて来る」と言うのである。この「子供の泣き声」は織田自身が気に入っていたようで、「蜩」(「文芸春秋」昭和19・9)では、幕末の伏見の寺

田屋を仕切る登勢の耳にも「赤児の泣声」を響かせている。その登勢は、薩摩藩士が同士討ちした際に聞いた「おいごと刺せ」の声が耳に残り、それが「火のついたような赤児の泣声の一途^{いちず}さに似ていた」と思うのだ。

坂田三吉はまた、「栓ぬき瓢箪の気持」で将棋はささなければならぬとも言(「聴雨」「新潮」昭和18・8)。大阪駅のプラットフォームの雑踏で見た、口を開けて空を見上げて佇立していた男のことである。「ぽかんと栓抜き瓢箪のような恰好で突っ立っている姿、ちようどゴム鞠の空気を抜いたふわりとした気持、何物にもとらわれぬ、何物にもさからわれぬ態度、これを思い出すのである」とある。この「栓抜き瓢箪の気持」は、「郷愁」の、行くあてを失い駅のベンチで困惑していた「四十位のみすばらしい女」の「きよとんとした眼」や、梅田の地下道で深夜に目を覚ました浮浪者の子ども、なぜ自分はこんなところにいるのかといった「きよとんとした眼」をも想起させる。

この点景として写された人たちは何なのだろうか。「せんど泣いている子供」や、討つべき相手を壁に押さえつけ「おいごと刺せ」と叫んだ薩摩藩士(有馬新七)が「動」の人だとすれば、「栓抜き瓢箪」や「きよとんとした眼」は「静」の人である。にもかかわらずどちらにも共通するものが窺え、それは言ってみれば、外界の影響を受けずに自分自身に徹している人ということになろう。自分を客観視することもなく、自意識が働いている様子もない。屈託がなく、一途に自己にのみり込んでいて、いわば自己が自己化している様子である。日常生活を生きる人のある一面が、何かの拍子で極まった瞬間に表れる超越的な人間性とも言おうか。それをロマン主義的な彼方に向けず、変哲もない日常の中に置いて描き取っているのである。これは、織田作之助の発見した人間の描写であり、織田の文学的功績と言つてよい。

ここで言い添えて置けば、三高時代の織田は、小林秀雄と横光利一の講演を聴いており、この時代の文学的課題であった自意識についての知識があった。昭和八年に三高の文芸部が開いた小林秀雄の講演会と、翌年の中之島の中央公会堂で開かれた横光利一の講演会で、大谷晃一によれば、横光は「自意識分裂」について語ったという¹⁸。また、昭和九年頃の織田は「ジイドにかぶれて」いたとも大谷晃一は言う。そうでありながら、自意識の回転とは逆の意識の一点を形象する方向に、織田の文学は向かったのである。

こういう人間は、根本的に貯蓄とは無縁である。赤児は別として、また彼らの実生活はいざ知らず、この極まった瞬間にあっては、貯蓄はもとより「これだけは信ずる具体性だと思ってやってるんですよ」という「具体性」は空虚になっている。他者の介入のない自己の一途な静止状態は、そのとき、周囲の現実を超え出た人間の在り方を示している。自己を自己化している人たちは、貯蓄する心性とは別の位置にいると言つてよい。

では織田作之助は、これらの人たちをどう見ていたのか。そこには距離があり、同一化の願望は窺えない。それは自己の及ばない人のある一点に注視する語りであり、それを見つめることで自己を省みて、自身は見る場にとどまっている。尾崎名津子は「郷愁」の「きよとんとした眼」のベンチの女と浮浪者の子どもについて、「彼らがそこにいることは決して新吉（引用者注：織田を思わせる小説家）が彼らに届きえないことを示している」と述べる。しかし「一人の存在として決定的に分離されていると同時に、「きよとんとした眼」によって無媒介に結びつけられている」と指摘する¹⁹。鋭く正しい指摘だと思う。

織田作之助は、都市経済の網に圍繞されながら、そこからずり落ちたような人たちをそこに埋没することなく慈しんで描いたが、それを

可能にしたのは、あの一途な表情からの引力が作用したからではあるまいか。織田の小説は、そういう人たちを極点としながら、あらかじめ自らに失われている可能性を注視することで、自己と周囲の人々の不如意を肯定しているように見える。おそらく「信ずる具体性」は、その不如意を埋め合わせるべき代償として描かれたのだ。貯蓄はその象徴と言えよう。貯蓄とは、しばしば己の及ばないものの代償としてある。

以上、織田作品の貯蓄にまつわる人々を見てきた。次節では、短編「アド・バルーン」と長編『わが町』とを並行して論じながら、貯蓄と縁のない生き方を改めた人の話を読み解き、貯蓄と所有の関係について考察したいと思う。

3 貯蓄との折り合い

「アド・バルーン」（『新文学』昭和21・3）は、死を考えていた男が「無一文」になり、拾い屋の秋山さんと出会って、働き始め貯金をし、行方知れずになつてしまった秋山さんや父親と再会を果たす話である。「話が上手で、というよりお喋り」な「私」（長藤十吉）の語りによる一人称小説である。十吉は、生まれ落ちたとたんに母親に死なれ、里子先を転々としてから落語家^{はなし}の父に引き取られ、丁稚奉公に出ると奉公先を次々と替えて父からは勘当され、様々な仕事に就くものの飽きっぽく、言うなれば生まれつきの「放浪」の人生を送っていた。慕っていた漆山文子がレコード歌手として東京に行つたと聞くと、六十三銭しか持ち合わせがないのに線路伝いに徒歩で東京まで行く。「放浪への郷愁」と十吉は言うものの、その日暮らしの日銭で野宿をして凌ぐ日々である。ところが、やっと会えた文子はそんな十吉を「気味わる

く」思い、大阪までの旅費を差し出し、十吉はそれを「うっかり貰って」しまうのだ。「放浪への郷愁」を自ら否定し、その上帰ってきた中之島公園では変わらず「無一文」の「放浪」の身の上である。秋山さんから声を掛けられ、その日暮らしの日々からの脱出が図られる。

「アド・バルーン」は、「ここからがこの話の眼目」に入り、十吉の更生譚が語られるのだが、それ以前の誕生から東京行きまでの「放浪」が、「眼目」以上の分量をもって熱っぽく生き生きと語られている。とりわけ子ども時代に、父の二人の後妻である浜子と玉子に連れて行かれた高津神社から道頓堀、千日前あたりの夜の光景は、鮮やかに語られ印象深い^②。六十三銭だけの東京行きも含めて、十吉の語りが「放浪」する前半に力点を置いているのは間違いない、それは働いて金を貯め、秋山さんと再会する後半の話に優に匹敵するかそれを上回っているのである。

長編小説『わが町』（錦城出版社、昭和18・4）は、出稼ぎに行ったフィリピンのベンゲットで、多くの犠牲者を出した道路の難工事を終え、鼻息の荒い「ベンゲットの他あやん」として帰国した佐渡島他吉の話である。妻を亡くし、娘婿と娘も亡くして、残った孫娘の君枝を俵引きをしながら育てる。「人間はからだを責めて働かな嘘や」が口癖なのだが、ベンゲットの工事が終わるとマニラでは失業者となり、「儲けた金も全部使い果たして」しまい「放浪」の身になっていた。他吉は働くことは厭わないが、荒い気性が勝って仕事や儲けをフイにしかねない男である。

十吉は、拾い屋を共にした秋山さんと別れて、車の先引きを経て得意の喋りを生かして紙芝居屋に転身した。禁酒会に入り「禁酒宣伝や貯金宣伝の紙芝居を見せたり」しながら、毎月十円ずつ「禁酒貯金」をし、「秋山名義の貯金通帳」もこしらえて「毎月十日に一円宛入^{ずつ}れ

ることにした」。それが四十円貯まると、秋山さんに会いたい気持ちが高まり、警察に所在探しを頼みに行ったところ、府庁詰めの「朝日新聞」の記者が「秋山さんいずこ。命の恩人を探す人生紙芝居」という記事を書いた。それがもとで再会を果たすのである。二人はさらに「人生双六」の第一歩を踏み出そうということになり、互いのための一円貯金をし、五年後の昭和十五年三月二十一日に四天王寺で日の入りの時刻に再会しようと約束する。五年後、前日の「朝日新聞」がまた記事にしたので多くの人が集まり、そこに秋山さんが来る。父の円^{だじ}団治も駆けつけて、二重の再会が果たされることになる。

この話は、「大阪朝日新聞」の「人生双六」の記事が基になっていることを諸岡知徳が報告している^③。昭和十一（一九三六）年三月二十日と同年三月二十四日の記事である。東京から徒歩で大阪にやって来た伊藤清という人が、六十三銭しか所持金がなく途方に暮れていたところに拾い屋の秋月（後に秋津と訂正される）から声をかけられ、拾い屋、荷車引きを経て紙芝居屋になって、命の恩人を探していたところ、新聞記事がもとで再会を果たしたというのである。五年後に再度の再会を約束し、その昭和十六年三月一日（夕刊）と三月二十二日にも記事が出て、四天王寺での再会の叶ったことが大きく報道された。そしてさらに五年後の再会が約束されたのだった。「二読すれば、「アド・バルーン」がこの新聞記事に取材していることが容易に理解できよう」と諸岡知徳が述べたとおり、「アド・バルーン」の十吉と秋山さんとの出会い以後の記述は、ほぼそのまま「大阪朝日新聞」の記事を踏襲しているのである。

「アド・バルーン」内の記事を「朝日新聞」と明記したのは、出典を記して使用許可を得る意図があったからであろう。再会の場所と日時が四天王寺の春の彼岸の中日なのも典拠どおりで、太陽が西門に沈む

日想観のこの日に、父親の円団治が出現したのは、能の「弱法師」や歌舞伎の「撰州合邦辻」の基となった俊徳丸伝説を踏まえたからだと思われる。

もともと「人生双六」のトピックスは、それ以前の昭和十（一九三五）年五月十六日の「東京朝日新聞」朝夕刊に二度記事になった（同日の「大阪朝日」にも掲載された）、鹿児島市の若者が出奔するときに友人に慰められ、十年後に皇居の二重橋前で再会しようと約束したのが事の始まりである。その後、「人生双六」と名づけられて、続報や飛び入り参加もあって何度か記事になり、再度の約束の昭和二十年五月十五日には、二重橋前で二人は無事再会を果たした（「朝日新聞」昭和20・5・16）。大阪の「人生双六」は、それと連動した話として「大阪朝日」が取りあげたのである。

この話は、中村正常作・演出の二軒のサラリーマン家庭の話としてラジオドラマ「人生双六競走」にアダプトされ（昭和十二年十月一日放送）、ニュース演芸「人生双六」としても放送された（昭和十三年一月二十三日）。昭和十三年には松竹家庭劇が、曾我廼家十吾と渋谷天外の演じる「人生双六」として上演し、東京公演も好評だった。²²「アド・バルーン」以前に、「人生双六」の話は広く知られていたのである。松竹の芝居は喜劇として巧みな話に仕上がっており、その後も藤山寛美らに受け継がれ今世紀の現在まで上演され続けることになる。

さて、注目すべきは貯金である。十吉は、「貯金宣伝」の紙芝居もあり、紙芝居屋の後は「貯蓄会社の外交員」になり、自身の貯金は「その頃千円を越していた」というから、貯蓄に過剰適応して大変身を遂げたと言わざるをえない。貯蓄会社勤務や貯蓄額は新聞記事にはないから、織田の創作である。すでに述べたように貯蓄奨励は政府主導でなされたから、十吉の変身は国策に沿ったものであった。千日前の鴈

治郎横丁にある父のしもた屋に落ち着いた十吉は、二年後に父を看取り、父の何人目かの老いた後妻と高野山に納骨に行く。²³中の院の茶店では「今日も空には軽気球……」とレコードの歌が聞こえ、それが文子の声に似ているようにも思うが、それだけだ。そして「ふとこの婆さんに孝行してやろうと思った」とあって作品は閉じる。

こうして見てくると、この後半部分は、やや通俗性が勝っていると感じられないだろうか。主人公が経済的安定の中で家族との絆を取り戻し「孝行」する思いに落ち着くのは、あまりに真つ当で、読者の甘い期待に添いすぎている。端的に言ってこの結末は、作品の価値を低めていると判断せざるをえない。作者は十吉に、「もともとと極端に走りやすい私は」と言わせてエクスキューズを配していたのだが、そのこと自体がこの語りの通俗性を意識していたからだとも思われる。この話を「美談であるとするれば」と及び腰で語り、「美談というものはおよそ面白くないのが相場のようなのですから」と弁解しているのも、話の終着への羞恥が滲み出ている。つまりこの小説は、結末をそのまま肯定してはいないのである。

では織田作之助が、すでにかなり知られた話を、新聞記事をそのまま使って、作品の価値を貶めるかのように制作したのはなぜなのか。なおかつ貯蓄に励み、それを甘い「美談」に落とし込んだのはなぜだったのか。「アド・バルーン」には、文字通りに受けとめられない不可視の逆説が仕込まれているようで、そこには読者の通俗性やさらには国家的な権力に対する反撥の意図も仄見えるのだが、しかし作品は、穏やかで通俗的な地点に平然と着地しているのである。これを単純に小説の瑕疵と見てしまうこともできるのだ。この点について、藤原耕作は次のように述べる。

「アド・バルーン」は、一見国策に奉仕するように見える「美

談」を「この話」「眼目」「肝腎の部分」とすることで、戦争協力的な姿勢を見せないと発表も危ぶまれる戦時下の表現をめぐる隘路を切り抜けることを狙いつつ、前半と後半のバランスや語り方を工夫することで巧みに「美談」を矮小化すると共に空襲で失われる前の古くなつかしき「大阪の町町」を詳細に描き込み、それへの「惜愛の気持」を語るといふ本来のモチーフに重心を置き、典拠の利用の仕方を工夫することで「美談」の時局性を骨抜きにすることを可能にしている²⁴。

「アド・バルーン」はすでに述べたように戦後に発表された小説だが、書かれたのは戦中で（初出末尾には「二〇・六・一〇」と欄筆日がある）、発表も戦中に予定されていた。藤原耕作は、戦時下の検閲を見据えた織田の面従腹背を「アド・バルーン」に見えて、この一歩踏み込んだ論評は評価できる。それとともに、自らの作品に意図的な欠点を充填した織田の小説技巧と権力への柔軟な対抗姿勢には、あらためて感嘆せざるをえないのである。藤原論文はさらに、作中の再会の年が一年前倒しされ、作品には描かれない昭和二十年三月二十一日の次の再会が、大阪大空襲の直後に設定されたという諸岡知徳論文の指摘を踏まえ、空襲被害の描写を禁じた言論統制に一矢報いるとともに、戦前のミナミの賑わいを廃墟の中に幻視させる意図があったと論じている。織田作之助の油断のならない技巧をここに見ることができるといえる。

『わが町』の他吉は、妻と娘夫婦を亡くした後、孫娘の君枝を里子に出すと急に吝嗇になる。里子の養育料に月二十円かかり、婿が桶屋を開業したときの借金も残っていたからだが、他吉は朋輩と客の醜い奪い合いもし、小銭を貸してはうるさく利子を取るまでになっていた。君枝が十歳になると日の丸湯の下足番をさせ、給金や祝儀は腹巻きに入れてしまい、小遣いを渡すこともなかった。その金が八百円の郵便

貯金となって、突然出てくるのである。君枝の夫となった潜水夫の次郎が怪我をして入院し、そこに君枝の妊娠が分かって、他吉が貯金通帳を差し出すのだ。長編小説の危機を収束させるデウス・エクス・マキナのような金である。はじめは君枝の養育費だった貯金が、他吉のマニラ行きの資金に変わり、君枝の父がマニラで死ぬとその墓参りの旅費に目的を変えていた金が、君枝夫婦の窮地を助けることになる。

マニラは他吉の懐旧の町で、他吉の半生を支えてきた心理的な楽土である。そこは気性の荒い「ベンゲットの他あやん」が生（き）のままにられる無何有（むかう）の郷（さと）であり、本来の破天荒な生き方が保証される理想化された町にはかならない。そこでその日暮らしの気楽さには、貯蓄をし続ける堅苦しい生活とは違うオルタナティブな生の哲学が生きていたはずだ。他吉の長年の貯蓄とその譲渡は、孫娘への無骨な愛情にくるまねながら、逆説的にその荒々しくも気楽な生き方を幻として浮上させるのである。そう読んでみると、『わが町』の結末も文字通りには受け取れない。そしてこの読み方は、他吉が長い間何に耐えてきたのかもあぶり出すのである。

『わが町』の他吉も「アド・バルーン」の十吉も、貯蓄をして安定した生活を求めるのとは異なる生き方をしていた。その日暮らしの身勝手な生き方である。織田作之助の小説では、そのまま生の下降線を辿って行く結末も予想される設定だ。それをこの二作品は、平穏な結末とは裏腹に必ずしも否定していない。それは貯蓄のドクサを解体する方向にあり、資本主義の中で形成された貯蓄のドクサを無意識に受け入れている人々に、別の批評的価値を提示することになるだろう。少なくとも堅実性に固定化した生き方や価値観を相対化するはずだ。

十吉や他吉の彼方には、「きょとんとした眼」や「栓抜き瓢箪」がある。「赤児の泣き声」や「おいごと刺せ」の叫びへの共感も感じ取れ

る。しかし、現実生活の重みを背負う彼らはそこに行き着けないし、かつての破天荒な人生を、貯蓄する堅実な生き方によって上書きせざるをえなかったのである。それでも、「あの、ふわふわと空に浮いている、不安定な感じを、この作品は実によく出している」と河盛好蔵が評した軽気球^{アドバルーン}は、栓抜き瓢箪を思い起こさせるだろう。他吉が最期に見た電気科学館のプラネタリウムでのマニラの南十字星もここに重ね合わせることができる。そしてその極点からの引力を、彼らは感じ取ったように書かれているのである。

織田作之助の中には、自分勝手に生きる気楽さの価値観と、家族や共同体とともに生きる「わが町」の生き方とが闘ぎ合っており、その闘ぎ合いが織田を文学へ進めたと考えられる。貯蓄する十吉や他吉をどのように評価するかは、また、読者の人生観や金銭観に委ねられてもいる。ただ織田の文学が、下降や破滅をも恐れぬ身勝手な気楽さの可能性を、現実への批評として捨てきれなかったことは繰り返し述べておきたい。

そうだとすると、「アド・バルーン」や『わが町』は、結局、貯蓄と折り合いをつけたことになる。折り合いをつけるとは、貯蓄の意義を肯定したということではなく、貯蓄を真に我がものとしてその存在を自己の中に引き入れたということである。貯蓄は、自己の所持する金銭を自己から一旦遠ざける行為である。十吉は貯蓄会社の外交員として働きながら、秋山さん名義の貯金をこれからも続けるだろうが、「もう私には大した望みもない」と言っているように、何事かをなそうとは思っていない。父の老妻に「孝行してやろう」と思う彼は、貯金を殖やす欲望はもうないにちがいない。しかしそうなったとき、十吉と「千円を越し」た貯蓄とは、距離が縮まり折り合いが付き充足感が生まれ、貯蓄は真に彼の所有になるのである。

他吉の「八百円」の郵便貯金は、彼の希望だったマニラ行きには使われず、孫夫婦に譲渡されることで、夢見る貯蓄ではなくはじめて現実の貯蓄として他吉のものになる。しかも鷺田清一『所有論』の論理を援用して述べれば、それが譲渡されることで、他吉の所有であることが意味を持つようになるのである。金銭に振り回されてきた十吉や他吉にしてみれば、貯蓄が真に自分のものになるとは、それまでの人生が他ならぬ自分のものとして受けとめられるということになるはずだ。貯蓄とは、そういうものでもある。

注

- (1) 池上彰『池上彰のやさしい経済学 2 ニュースがわかる』（日経BP、日本経済新聞出版、二〇二二・一一）二七二頁
- (2) 注1に同じ。二七四頁
- (3) 中村隆英『昭和経済史』（岩波現代文庫、二〇〇七・五）三五一頁
- (4) 富永健一・間々田孝夫編『日本人の貯蓄——行動と意識』（日本評論社、一九九五・六）一八頁
- (5) 外山茂『日本人の勤勉・貯蓄観』（東洋経済新報社、一九八七・四）四頁
- (6) 二宮尊徳著、福住正兄編『二宮翁夜話』（岩波文庫、一九三三・六）卷之一、一六、三二―三三頁
- (7) 注6に同じ。卷之三、七九、九三頁
- (8) 『郵便貯金局郵便貯金事務史第一編』（郵便貯金局、一九一〇・八）一頁
- (9) 前島密の署名。郵政省『郵政百年史資料第一卷 太政類典公文録（郵便・為替貯金）』（吉川弘文館、一九七〇・三）一二七頁
- (10) 田中光『もう一つの金融システム』（名古屋大学出版会、二〇一八・一二）二一頁
- (11) 貯蓄増強中央委員会編『貯蓄運動史——貯増委30年のあゆみ』（貯蓄増強中央委員会、一九八三・三）一頁
- (12) 藤原章生『25年後のアフリカ 番外編 金はたえずに使い切る』（『毎日新聞』二〇二五・四・一七、夕刊）
- (13) 鷺田清一『所有論』（講談社、二〇二四・一一）二二〇頁
- (14) 尾崎名津子は『織田作之助論——〈大阪〉表象という戦略』（和泉書院、

- 二〇一六・六)で、順平は「先天性梅毒患者」であり「この結末は希望を示しているのではない」と指摘する(五二頁)。作者が順平の希望にこの苦い認識を添えたことはありうろと考えられる。
- (15) 高橋政雄「貯蓄のうらとおもて」(「貯蓄時報」一九四九・九、日本銀行貯蓄推進部編『貯蓄の論理 貯蓄に関する論説集』貯蓄増強中央委員会、一九六五・三所収) 一七頁
- (16) 「タバコ値上げ決まる 自由販売はきょうから」(「朝日新聞」一九四七・一二・二〇) 二頁
- (17) 注11に同じ。一五頁
- (18) 三高時代の記述は、大谷晃一『生き愛し書いた——織田作之助伝』(講談社、一九七三・一〇)による。九七、九九、一〇三頁
- (19) 尾崎名津子『織田作之助論——〈大阪〉表象という戦略』(注14) 三二八頁
- (20) しかし斎藤理生は、作中の楽天地や通天閣が時代に合っていないと指摘している(『小説家、織田作之助』大阪大学出版、二〇二〇・二) 一七八頁
- (21) 諸岡知徳「織田作之助「アド・バールン」論——「美談」の位相」(『甲南国文』二〇二一・三) 六五～七二頁

- (22) 署名「S生」(松竹家庭劇二の替り評 真剣味が横溢 力作は『人生双六』(「東京朝日新聞」一九三八・六・二三夕刊)、渥美清太郎「六月劇評 家庭劇二の替 人生双六」(「読売新聞」一九三八・六・二四夕刊)
- (23) 斎藤理生は十吉が語りたかった再会の相手は父の円団治だったという解釈を示す(注20。一八九頁)。そうだとすれば、父の死と納骨は十吉が人生に一区切りをつけたと考えられる。
- (24) 藤原耕作「織田作之助「アド・バールン」とその時代——空襲と検閲を視座として」(『日本近代文学』二〇二五・一二) 一〇二頁
- (25) 河盛好蔵「解説」(『現代日本文学全集81』筑摩書房、一九五六・一二) 四一五頁

○織田作之助作品からの引用は、岩波文庫『夫婦善哉 正統他十二篇』『六白金星・可能性の文学 他十一篇』『わが町・青春の逆説』に拠った。

(近畿大学名誉教授)